

中大生の旅するチカラ

10

◇東日本大震災から一年

観光のチカラで復興応援を(いわて三陸編)◇

復興元年に期待されるチカラ
観光を新たな支援の局面へ

東日本大震災から一年、今年は復興元年にあたる。岩手県釜石市生まれの筆者は、あの大津波で親族や生家を失った。そして都会に暮らしながらも、「今、私にできること」を問い続けた。たどり着いたのは復興の過程を世に知らせ、観光側面で貢献することだった。

震災直後は被災住民を受け入れ、次いで復旧工事関係者らに枕を提供しながら再建の道を模索する被災地の旅館ホテルを、数多く訪ね歩いた。ときには農山漁村の生産者たちに耳を傾け、刻々と変容する被災地を行動して、物産被害なども取材した。そうしたなかで、被災者たちから期待されるのが観光のチカラと知らされた。すでに復興計画が

発表され、新たなまちづくりが始まりつつある。しかし雇用を求めて域外への人口流出が進むなか、観光を軸にした交流人口の増大を推し進めることは、被災地に留まる人たちへの大きな支援になる。旅人が行き交うまちの再生に期待を寄せているのがうかがえた。

来る創生のときを待たず、被災後の変わりゆくまちの風景、震災の爪痕を、若い人たちにも積極的に足を運んで観てほしい。遠隔地からの応援消費やお見舞い・お悔やみ消費とは違う角度から支援をすべき、新たなフェーズにさしかかっていると感じるのである。

根づくボランティアアツリズム

「津波語り部」が観光を支える

東日本大震災は、日本にボランティアアツリズム



千葉 千枝子

Chiba Chieko

■ちば ちえこ 観光ジャーナリスト。東京成徳短大・城西国際大観光学講師。1988年中央大学経済学部卒、富士銀行入行。シティバンクを経てJTBに入社。96年有限会社設立。運輸・観光全般の執筆、講演活動を行う。日本旅行作家協会、日本観光研究会等所属。著書に「JTB旅をみがく現場力」(東洋経済新報社)など。近著に「観光ビジネスの新潮流」(学芸出版社)がある。

ムという概念を決定的に根づかせた。過去の災害とは違った規模でボランティアが組成され、継続的かつ反復性をもって活動が行われているのは周知のとおりだ。

宮古市田老の「グリーンピア三陸みやこ」は、三陸観光の拠点として旧年金福祉事業団が1980年代に開業した敷地100万坪もの大規模リゾート施設である。のちに自治体へと払い下げられたが、震災後は県内最大400棟もの仮設住宅が建設され、保養地としての役割にひとたび幕を閉じた。

現在、敷地内には、中小企業整備機構によるプレハブ3棟が建設され、地元商店が営業を再開している。その一つ「善助屋食堂」で昼食をとっていると、何やら賑やかに若者たちが店内へと押し寄せた。名前を綴ったシールを胸に貼っており、



「グリーンピア三陸みやこ」の仮設食堂で笑顔をみせるボランティアの人たち

一目でボランティアとわかった。隣り合わせた女性に尋ねると、金曜夜に東京・浜松町のバスターミナルを発つて、週末ボランティアに被災地を訪ねること8回目という。岩手県北観光が主催するボランティアツアーの参加者たちだった。別の女性は、「頻繁に来ることができないので、アルバムを東京へ持ち帰り、写真再生のお手伝いをしています」と語る。誰もがそれぞれに、今、できることを実践しているのだ。

一部、路線が寸断された三陸鉄道では、職員らが立ち上がり、防災教育を目的にした被災地フ

ロントライン研修を実施する。鉄道マン自らが案内人となって被災の状況を語り継ぐ。首都圏からの動きでいち早くつたのがクラブツーリズムだ。震災後の7カ月で3000人もの旅行者を被災地へと送り込み、直接消費を促した。駅舎が消えた

島越（しまのこし）付近を「津波語り部ガイド」の先導で訪ね歩き、当時の悲惨な状況に参加者たちは静かに耳を傾ける。建築や地質などの研究者だけでなく、こうした一般消費者もまた、被災地で心の学びができる点で、エージェントの果たす役割は大きい。ちなみにガイドの養成には、エコツーリズムで定評のあるNPO法人 体験村・たのはたネットワークがノウハウを発揮した。近くでは特別授業の一環に、東京・正則高等学校の生徒らが訪れたばかりと聞く。教育旅行の分野での期待が大きく寄せられた。

「震災を見世物（みせもの）にしているのではないか」、「今さら観光どころではない」という声も聞こえなくもない。しかし被災者の雇用創出に一役買うばかりか、一、二次的な経済波及効果ははかり知れない。学びの観光に賛同の意見は根強い。何より悲しみを乗り越え、後世に伝えようとする被災者の姿勢や使命感ほど尊いものはないからだ。

破壊された防潮堤を前に、多くの人たちがそれぞれ3・11を振り返る。ボランティアツアーリズムや被災地観光は、まさに創生への結節点の今こそ、参加する意義があると感ずる。

いわて三陸の食の恵みを活かす 生産者と消費者結ぶ新たな役割

食の宝庫といわれる東北いわて三陸地方。南北に延びるリアス式海岸は海流の影響から、内陸とは違って荒々しくも暖かく、それは人柄にも表れる。震災一年を目前にした2月半ば、宮古ホテル沢田屋を会場に、「いわて三陸観光講演会」に登壇する機会を得た。

真イカの胴体部分を干した「いか徳利」の「木村商店」や天然海藻アカモクの佃煮を販売する「三五十（みごご）」、新鮮な魚を独自の製法で加工す



宮古の台所「魚菜市场」は、クラブツーリズムなどが主催する被災地観光の立ち寄り箇所にもなっている



沿岸広域振興局に設置された観光振興情報センターに勤務する菅原加寿子さん(左)と。彼女も家を流され、一時は職も失った

る「山根商店」、いかせんべいの「すがた」、義経北行伝説・菓子舗の「つちや本舗」、海産アイデア商品を製造販売する「まるき水産」、それに「南部鮭加工研究会」や「山英」など水産加工の多くの経営者らが集い、会場を埋め尽くした。ここに挙げたすべてが工場、商店、自宅を半壊ないしは全壊の被害に遭った。それでもどこか番地を代えて、営業再開にこぎつけたという。

私は講演のなかで、「やがてアジアの民が東北沿岸へも大勢、訪れるだろう」と、アジア大交流時代の到来と日本の観光展望を口にした。その途端、多くの聴講者たちが目を輝かせ始めたのである。そのルートづくりや安全性、受け入れ態勢の情報発信を、行政と観光など各分野の専門家たち

が総力を挙げて行うべきときにある。「食」は万国共通語だ。食文化体験に言葉の壁はない。「内陸・平泉が世界遺産観光で振るうのであれば、被災した沿岸地域では交流や体験を主軸にしたフードツーリズムを、今から構築していこうではありませんか」。そうした言葉に大きく頷いてくれた姿が印象的だった。

観光は、生産者と消費者を結ぶ大きな架け橋である。当地で食べた美味しいものを地元で買って帰り、なかには都会の名店で消費がなされてこそそのルーラル・テベロップメントである。フードツーリズムの先進・フランスなどでみられる食を通じた観光の在り方が、沿岸被災地の復興のヒントになる。

自然景観の普遍性と 人智創造物にない強さ

景勝地・浄土ヶ浜は、レストハウスが再建中だがデジタルセンターに被害はなく、流紋の岩々が姿を変えずに佇む。日本三大鍾乳洞の一つ龍泉洞にあつては、洞内が地震の影響をまったく受けずに済んだ。深い碧をたたえた地底湖が、LED光に怪しく映しだされている。夏はサツパ船が行き交う北山崎の海も景観麗しく、自然が奏でた景観は、いずれも普遍だ。自然に抗うことができなかったのは人智創造物であつて、しかし人ではない。私たち人間は、ちっぽけだけれど負けていないと知らされる。



かつての佇まいのままにある陸中海岸国立公園・浄土ヶ浜に自然景観の普遍性を感じる

さて、くだんの宮古講演には遠く岩泉町や田野畑村、そして釜石市や大槌町など市外からも多くの人たちが駆けつけてくれた。講演を終え、一息ついた私に一本のメールが入った。そこには中央大学在学中に机を並べたクラスメートの名前があつた。その彼が、ちょうど宮古に来ているという。懇親会の席に顔を出してくれた彼は、現在、県の復興局で被災者の相談支援を行っていると言って、頭が下がった。四半世紀ぶりの再会だった。人との絆は堅く、時空を超えると感じた一夜であつた。